



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

インフォーマルな会話の文末表現に表れる女性語・男性語をめぐる作家の個性：
吉本ばなな『アムリタ』と村上春樹『ノルウェイの森』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3349

インフォーマルな会話の文末表現に表れる 女性語・男性語をめぐる作家の個性

—吉本ばなな『アムリタ』と村上春樹『ノルウェイの森』—

杉山純子

A Pilot Study of Different Styles through Two Authors' Use of Sentence Final Markers in Informal Dialogues

—Yoshimoto Banana and Murakami Haruki—

SUGIYAMA Junko

In general, there are some differences between sentence final markers (SFMs) used by female and male speakers in an informal Japanese conversation. I have been teaching Japanese literature to advanced learners of Japanese whose L1s are Korean and Chinese. Of many contemporary writers, these young readers seem to prefer Yoshimoto Banana and Murakami Haruki. Although these two writers share similar views about the world and use very clear and simple, but casual expressions, there are some differences between their uses of SFMs, particularly those of female characters in their novels.

This article attempts to determine their tendencies toward the use of SFMs by cluster analysis and principal component analysis based on the SFMs in informal dialogues which occur in Yoshimoto's *Amurita* and Murakami's *Norway no Mori* [Norwegian Wood]. In this analysis I adopt the method used in Jin and Murakami's study (1993) on comma placement for deducing authorship on the basis of quantitative analysis.

The result of my analysis indicates the following three points:

1. Female characters in Murakami's novel use much more feminine SFMs than those in Yoshimoto's.
2. Female characters in Yoshimoto's novel use mainly neutral SFMs, and a few, slightly more feminine SFMs than both authors' male characters.
3. Male characters in both Murakami's and Yoshimoto's novels use neutral SFMs, although Murakami's male characters have a little more masculine tendency than Yoshimoto's.

Thus, it can be concluded that Murakami, a male author, gives his female characters a very feminine voice, while he does not give his male characters a very masculine voice. In contrast, Yoshimoto, a female author, selects relatively neutral SFMs for both her male and female characters. A further and more comprehensive study will be necessary to determine differences between female and male authors' attitudes and feelings toward gender-related speech styles.

1. はじめに

日本語における会話文には男女差が出ると言われてきた。例えば、標準語で、一人称の「ぼく」「おれ」は基本的には男性語であり、女性がそのような人称を使うとしたら、なんらかの理由で男性らしさを演出しようとしている場合であると考えられる。一方、「あたし」は基本的には女性語であり、男性が「あたし」と言う場合にはわざと女性らしさを演出しようとしているのだと思われる。同じ一人称であっても、「わたし」はフォーマルな会話文では男女が等しく使い、インフォーマルな会話文では女性の方がよく使う。しかし、インフォーマルな会話文で男性が「わたし」と言っても、「あたし」ほどの違和感はない。一人称を例に挙げたが、実際の会話文では一人称の省略が多い。それでも、なお、インフォーマルな会話文では、多くの場合、スクリプトを見ただけで発言者が男性か女性かを推測することが可能である。勿論、発言内容から男女差を判断することもできるだろうが、内容を考えずに文末表現を見て判断することもできる。例えば「雨が降ってきたわ」「今ひまなの」「何をしてるのかしら？」という表現が出てきたら、発言者が女性であると考えるのが妥当であろうし、「行くぞ」「よくやったな」「飲め」（動詞の命令形）などが出てくれば、発言者は男性であると推測できる。しかし、「だれが言ったの？」は女性的ではあるが実際には男性も使うことがあるし、「よかったね」は男女両方に使われている。

このように、日本語には、1) 女性的表現 2) 男性的表現 3) 中性的（あるいは両性的）表現が混在している。本研究では、筆者の担当する上級日本語学習者を対象にした「日本文学講読」のクラスで学生に最も人気の高い二人の作家、吉本ばななと村上春樹の作品を取り上げ、作品中に出現したインフォーマルな会話文の文末表現をデータにして、作家別、及び、登場人物の性別に文末表現を集計調査した。そして、二人の作家がそれぞれの描く女性キャラクターにどの程度女性的文末表現を使わせているのか、男性キャラクターにどの程度男性的文末表現を使わせているのかを数量的に分析してみた。

2. 文末表現の分類

会話文の文末表現の研究は、多くの場合、焦点が「終助詞」に向けられている。マグロイン(1993)は終助詞の用法には話し手の性差が影響することを認め、主張度の高い「ぞ」「ぜ」「さ」「な」は独言の場合以外は男性特有の表現であり、主張度の低い「よ」「わ」「ね」は女性的であると述べている。内田(1993)は大学生40組の会話を分析し、11種類の終助詞の男女使用比率を調査した。そして、「ぜ」「よな」の使用比率は100%男性であり、「じゃん」「よ」は80%以上、「さ」「さあ」は77%が男性であるという結果を得た。女性の使用率が100%であったのは「わ」と「かしら」である。また「よね」の使用率も60%以上が女性であった。内田はこの結果が井出(1979)の研究結果をほぼ追認するものであるとしながらも、「な」「なあ」の女性の使用頻度が井出の結果より増大し、また、「よ」「の」の男性の使用頻度が増大している点について、言葉遣いの中性化傾向の表れであると指摘している。しかし、終助詞の中でも、特に「よ」と「ね」はこの一文字の助詞だけを見て、単純に男性的、女性的と分類することはできない。性差は「よ」「ね」の前に来る品詞や他の助詞との結合によって、微妙に異なってくる。例えば、「ね」についての性差を見てみると、以下のような分類ができる。

1) 女性的に聞こえる場合

- a. 名詞・形容動詞の現在形と結合する時 「雨ね」「今日はひまね」
- b. 助詞「の」「わ」と結合する時 「ひまなのね」「行くわね」
- c. 名詞・形容動詞の現在形, さらに「よ」と結合する時 「雨よね」「ひまよね」

2) 中性的,あるいは,両性的に聞こえる場合

- a. 助詞「よ」と結合する時のほとんど 「いいよね」「行くよね」
- b. 他の助詞と結合する時 「～からね」「～けどね」

3) 男性的に聞こえる場合

- a. 終止形と結合する時 「ひまだね」「あついね」「来たね」

鈴木(1993)は「話し手の聞き手に対する丁寧さに関する配慮」の観点から女性語の文末表現を分析し、女性が使った場合に「乱暴・無作法・女らしくない」というマイナス評価を受ける表現は女性語の範疇から逸脱したものであると指摘している。そのような視点から、女性的でない語形式として、鈴木は1) 動詞・補助動詞の命令形, 禁止の「な」, 2) 疑問の助詞「か」「かい」「だい」, 3) 意志を表す助動詞「う・よう」「まい」, 4) 推量を表す助動詞「だろう」「まい」, 5) 断定の助動詞「だ」を挙げている。このような女性的でない語形式は男性的表現形式と言い換えてもよいだろう。

これまでに述べてきた終助詞の種類や問題点をふまえ、吉本ばなの『アムリタ』(上巻)¹⁾と村上春樹の『ノルウェイの森』(上巻)²⁾に出現するインフォーマルな会話の文末表現を表1のように35種類³⁾に分類した。

表1 インフォーマルな会話文における文末表現

分類記号	分類内容	使用例
1) n n e	名詞・形容動詞+「ね」	雨ね, きれいね
2) v n e	動詞・形容詞+「ね」	来るね, 暑いね
3) d a n e	助動詞「だ」+「ね」	雨だね, きれいだね
4) y o n e	終助詞「よ」+「ね」	いいよね
5) w a n e	終助詞「わ」+「ね」	いいわね
6) n o n e	終助詞「の」+「ね」	あるのね
7) p n e	その他の助詞+「ね」	行くからね
8) n y o	名詞・形容動詞+「よ」	雨よ, きれいよ
9) v y o	動詞・形容詞+「よ」	来るよ, 暑いよ
10) d a y o	助動詞「だ」+「よ」	雨だよ, きれいだよ
11) w a y o	終助詞「わ」+「よ」	いいわよ
12) n o y o	終助詞「の」+「よ」	あるのよ
13) p y o	その他の助詞+「よ」	行くからよ
14) n d a	断定「んだ」	行くんだ
15) a f n o	平叙文+「の」	行くの

16) q n o	疑問文+「の」	行くの？
17) a f p h	助詞のない平叙文	行った
18) q p h	助詞のない疑問文	行った？
19) s a	終助詞「さ」	来るさ
20) z e z o	終助詞「ぜ・ぞ」	いいぜ, いいぞ
21) k a	疑問文+「か」	あるか？
22) k a i	疑問文+「かい」	いいかい？
23) k a n a	疑問文+「かな」	いいかな？
24) k a s h i r a	疑問文+「かしら」	いいかしら？
25) w a	終助詞「わ」	行くわ
26) n a	終助詞「な・なあ」	悪いな, ひまだなあ
27) d a r o	助動詞「だろう」	いいだろう
28) d e s h o	助動詞「でしょう」	いいでしょう
29) v o l	動詞の「う・よう」形	帰ろう, 食べよう
30) m a s h o	助動詞「ましょう」	帰りましょう
31) d i r v	命令形	行け, やってくれ
32) d i r t e	「て」形の命令形	行って, やって
33) j a n a i	確認の「じゃない」	いいじゃない
34) n f	文の途切れ (文末がない言いさし)	
35) o t h	その他	

3. 研究方法の背景

Jin & Murakami (1993) は作家の個性が読点の位置に現れることに着目し、読点の直前に使われたひらがな一字を変数として、総数26変数の出現頻度を9作品別⁹⁾に調べた。さらに、その頻度を相対度数に変えた後、階層クラスター分析と主成分分析によって、9作品が4群に分かれることをデンドログラムと散布図で表し、4人の作家別にきちんと分類されることを示した。この研究により、Jin & Murakamiは作品が作家本人によって書かれたものであるか、あるいは、模倣作品であるのかを、作家が無意識のうちに示す読点の癖によって見分けられることを証明しようとしたのである。

会話の文末表現に現れる性差を数量的に分析した研究はないが、本研究では上記の Jin & Murakami による数量的分析方法を応用し、階層クラスター分析と主成分分析を用いて、村上春樹の『ノルウェイの森』(上巻)に出現したインフォーマルな会話における女性文末表現(MF)、男性文末表現(MM)、吉本ばなの『アムリタ』(上巻)の中の女性文末表現(YF)、男性文末表現(YM)の4つがどのような群に分類されるのかを調べた。

4. データ分析結果

4.1 相対度数

まず、両作品中のすべてのインフォーマルな会話文を取り出し、MF、MM、YF、YMの4項目別に前出した35種類の観測変数の頻度を集計した。次に、その頻度を表2のように4項目別に相対度数に変えた。

4.2 階層クラスター分析

クラスター化にはいくつかの測定方法がある。分析結果の信頼性を高めるためには数種類の測定方法を用いて分析し、どの分析方法でも同様の結果が出ることを示した方がよいと考え、本研究では一般的に最もよく使われるとされる(石村, 1998) Ward法、及び、Jin & Murakami (1993)の研究で選択されたComplete Linkage法、Group Average法、Single linkage法の4種類の測定方法を用いて分析した。その結果、図1-4のようなデンドログラムが得られた。

表2 2作品中に出現した35種の文末表現の相対頻度

	MF	MM	YF	YM
nne	2.0856202	0.31496063	2.21793635	0
vne	0	2.83464567	1.63934426	1.2567325
dane	0	2.04724409	0.67502411	1.07719928
yone	0.93304061	0.47244094	1.44648023	0.35906643
wane	2.19538968	0	0.67502411	0
none	1.20746432	0	1.2536162	0
pne	4.8298573	2.83464567	3.85728062	1.43626571
nyo	4.99451153	0	2.41080039	0
vyo	0.05488474	13.3858268	4.43587271	7.8994614
dayo	0	13.2283465	2.5072324	5.74506284
wayo	5.81778266	0	1.54291225	0
noyo	19.5389682	0	6.65380906	0
pyo	1.09769484	0	0.38572806	0
nda	0	7.55905512	0.19286403	10.4129264
afno	17.3984632	0	2.70009643	0
qno	2.96377607	5.98425197	6.65380906	1.43626571
afph	4.22612514	14.488189	13.1147541	35.3680431
qph	5.59824369	6.77165354	13.3076181	6.28366248
sa	0	3.77952756	1.15718419	0.71813285
zezo	0	1.25984252	0	0.17953321
ka	0	2.04724409	0.77145612	1.79533214
kai	0	0.31496063	0.09643202	0.17953321
kana	0.21953897	1.57480315	1.06075217	2.33393178
kashira	1.59165752	0	0.96432015	0
wa	4.77497256	0	1.73577628	0
na	0	6.45669291	2.12150434	3.05206463
daro	0	3.1496063	0.38572806	2.15439856
desho	4.00658617	0	2.5072324	0.89766607
vol	0.05488474	0.31496063	2.79652845	1.79533214
masho	0.49396268	0	0.19286403	0
dirv	0	1.1023622	0.48216008	0.17953321
dirte	1.97585071	0.15748031	2.31436837	0.71813285
janai	0.76838639	0.31496063	1.92864031	0.35906643
nf	9.38529089	5.19685039	9.16104147	10.4129264
oth	3.7870472	4.40944882	6.65380906	3.9497307
	100	100	100	100

図1 Ward法によるデンドログラム

***** HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS *****

Dendrogram using Ward Method

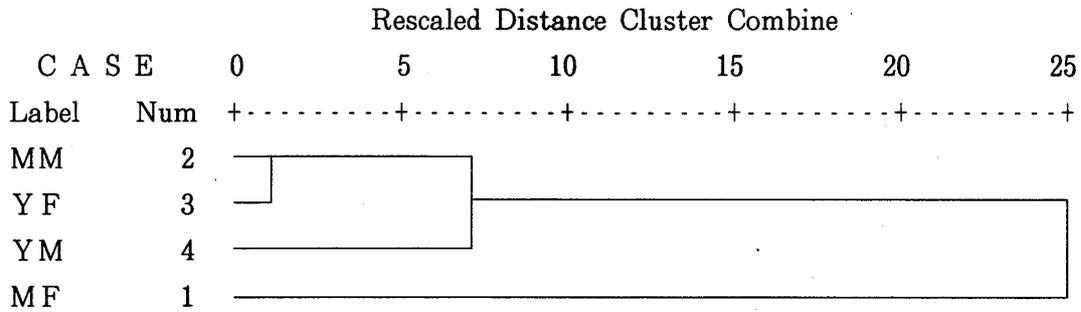


図2 Complete Linkage法によるデンドログラム

***** HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS *****

Dendrogram using Complete Linkage

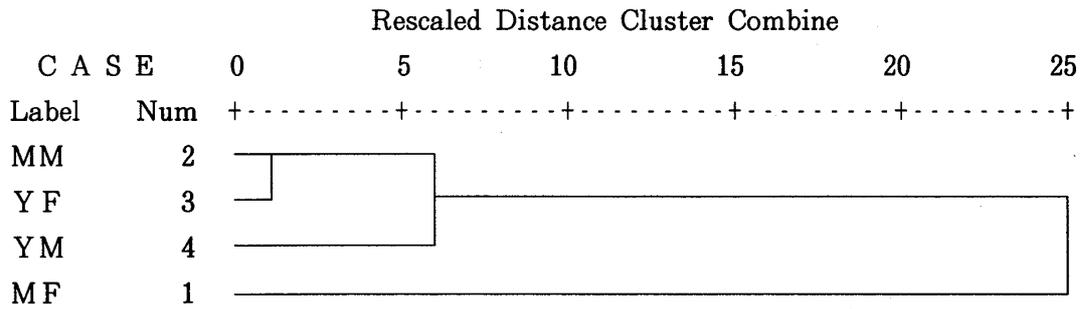


図3 Average Linkage法によるデンドログラム

***** HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS *****

Dendrogram using Average Linkage (Between Groups)

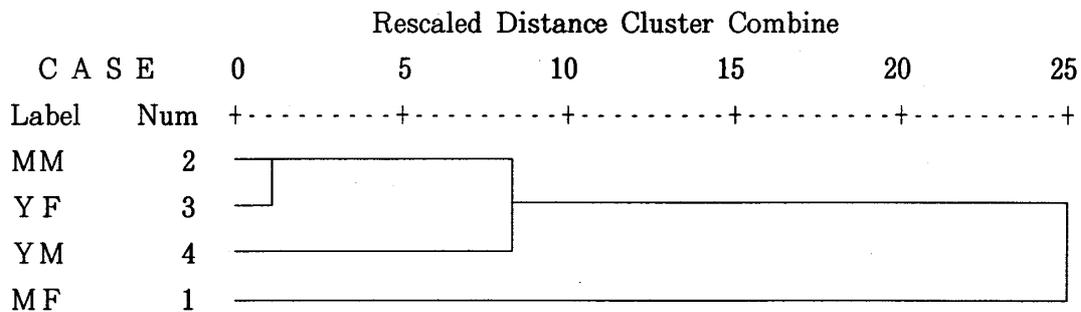
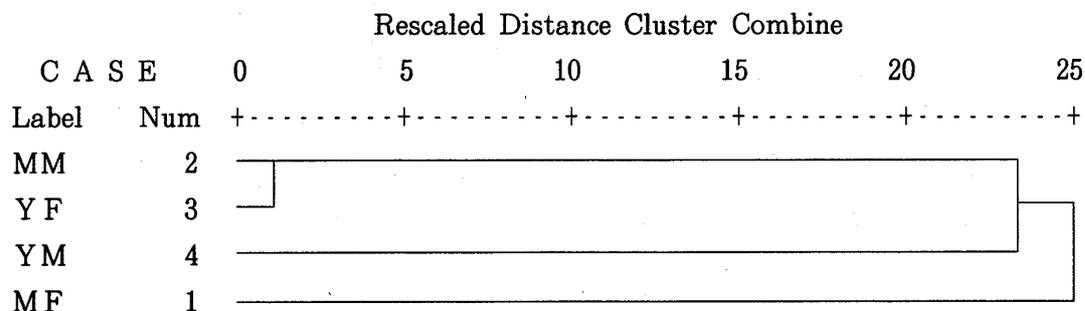


図4 Single Linkage法によるデンドログラム

***** HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS *****

Dendrogram using Single Linkage



以上の4つのデンドログラムはほぼ同じ形状を示している。この結果から、次の4点が明らかになった。

1. 大きく分けると、2つのクラスターに分かれる。ひとつのクラスターにはMM, YF, YMの3項目が収まり、もうひとつのクラスターにはMFのみが収まる。
2. YFはMMに近い。
3. YMはMM, YFと少し異なっている。

2番目の結果は吉本の女性話者が村上の男性話者に近い文末表現を使っていることを示しているが、その詳細については次のセクションで議論したい。

4.3 主成分分析

主成分分析の結果から、第1主成分と第2主成分の情報量の累積合計が88.528%であることが分かった(表3参照)。

表3 説明された分散のパーセント

Total Variance Explained

Component	Initial Eigenvalues			Extraction Sums of Squared Loadings		
	Total	% of Variance	Cumulative %	Total	% of Variance	Cumulative %
1	2.325	58.128	58.128	2.325	58.128	58.128
2	1.216	30.401	88.528	1.216	30.401	88.528
3	.237	5.914	94.442			
4	.222	5.558	100.000			

Extraction Method: Principal Component Analysis.

ここで、この2つの主成分の主成分得点を観測変数ごとに検討してみる(表4参照)。第1主成分の詳細を見ると、女性的文末表現と男性的文末表現は共に負の得点になっており、一般的に男性でも女性でも用いるような中性的文末表現は正の得点を得ている。第2主成分で正の得点を得ている文末表現は女性的傾向を示している。従って、第1主成分の意味を中性的傾向、第2主成分の意味を女性的傾向と読みとってよいのではないだろうか。

表4 観測変数の主成分得点

MARKER	MF	MM	YF	YM	FAC1_1	FAC2_1
nne	2.09	.32	2.22	.00	-.48929	.08956
vne	.00	2.84	1.64	1.26	-.29418	-.55347
dane	.00	2.05	.68	1.08	-.48193	-.56819
yone	.93	.47	1.45	.36	-.56223	-.19631
wane	2.20	.00	.68	.00	-.68541	.00085
none	1.21	.00	1.25	.00	-.64196	-.11870
pne	4.83	2.84	3.86	1.44	.06162	.46149
nyo	5.00	.00	2.41	.00	-.43586	.63059
vyo	.06	13.39	4.44	7.90	1.36587	-1.32290
dayo	.00	13.23	2.51	5.75	1.00499	-1.43232
wayo	5.82	.00	1.54	.00	-.51462	.69694
noyo	19.54	.00	6.65	.00	.33345	3.49031
pyo	1.10	.00	.39	.00	-.74001	-.21218
nda	.00	7.56	.19	10.41	.53180	-1.28793
afno	17.40	.00	2.70	.00	-.14724	2.78249
qno	2.96	5.98	6.65	1.44	.61248	.12723
afph	4.23	14.49	13.12	35.37	4.20134	-.63017
qph	5.60	6.77	13.31	6.28	1.77043	.96817
sa	.00	3.78	1.16	.72	-.29633	-.65823
zezo	.00	1.26	.00	.18	-.68189	-.54032
ka	.00	2.05	.77	1.80	-.42708	-.57772
kai	.00	.32	.10	.18	-.75556	-.45546
kana	.22	1.58	1.06	2.33	-.39939	-.49011
kashira	1.59	.00	.96	.00	-.66600	-.07766
wa	4.78	.00	1.74	.00	-.51491	.53470
na	.00	6.46	2.12	3.05	.19274	-.84993
daro	.00	3.15	.39	2.15	-.34909	-.70919
desho	4.01	.00	2.51	.90	-.39037	.44716
vol	.06	.32	2.80	1.80	-.35679	-.25335
masho	.49	.00	.19	.00	-.77382	-.33239
dirv	.00	1.10	.48	.18	-.64278	-.48599
dirte	1.98	.16	2.31	.72	-.45081	.07397
janai	.77	.32	1.93	.36	-.52634	-.17026
nf	9.39	5.20	9.16	10.41	1.50518	1.28561
oth	3.79	4.41	6.65	3.95	.64402	.33370

次に、主成分の因子負荷量行列(表5)を検討してみたところ、次の5点が観察できた。

1. MFは第2主成分における負荷量がかなり高く(.946)、第1主成分における負荷量は低い(.218)。つまり、MFはきわめて女性的傾向が高く、中性度が低いということになる。
2. MMとYFは第1主成分においての負荷量が類似している。このことはMMとYFが共に中性的傾向を示すことを意味している。

3. 第2主成分において、YFの負荷量は正である(.352)が、MMの負荷量は負である(-.400)。つまり、YFには女性的要素が含まれているが、MMには女性的要素がないことを示している。
4. YMは第1主成分における負荷量がかなり高い(.909)。従って、YMは中性的傾向が強いということになる。
5. 第2主成分において、YMの負荷量は負である(-.191)。このことから、YMには女性的傾向がないことがわかる。
6. MMとYMを比較すると、共に負の負荷量を示しながらも、MMの方が第2主成分における負荷量が低い。つまり、MMの方が非女性度が高い、言い換えると、MMはYMよりもやや高い男性的傾向を示しているということになる。

表5 主成分の因子負荷量行列

Component Matrix^a

	Component	
	1	2
MF	.218	.946
MM	.841	-.400
YF	.862	.352
YM	.909	-.191

Extraction Method: Principal Component Analysis.

a. 2 components extracted.

4.4 分析結果のまとめ

クラスター分析の結果はYFがMMに非常に近いことを示していた。主成分分析の結果、この2つが第1主成分、つまり、中性的傾向という点で類似していることがわかった。しかしながら、第2主成分、つまり、女性的傾向という点を考慮すると、YFを単純にMMと同じであると考えすることはできない。YFには女性的傾向が見られるが、MMには女性的傾向が見られず、わずかながら、男性的傾向を示している。以上の結果を総合すると、YFもMMも共に中性的傾向が強いが、YFは女性的な中性傾向を示し、MMはやや男性的な中性傾向を示していると言ってもよいだろう。

クラスター分析と主成分分析の結果をまとめると、次の3点の要点が浮かび上がってきた。

1. 村上春樹の『ノルウェイの森』(上巻)に登場する女性キャラクターがインフォーマルな会話で使用している文末表現はきわめて女性的である。
2. 吉本ばなの『アマリタ』(上巻)に登場する女性キャラクターはかなり中性的な文末表現を用いて話しているが、少し女性的な部分も見られる。
3. 両作家の男性キャラクターは中性的文末表現を使って話す傾向にあるが、村上の男性キャラクターの文末表現は吉本の男性キャラクターよりやや男性的である。

以上のことから、男性作家である村上春樹は女性作家である吉本ばななよりも、はるかに女性的なことばを話す女性キャラクターを登場させていることがわかる。一方、吉本ばななは女性キャラクターに、女性的傾向を残しながらも、きわめて中性的なことばで会話を進行させているのである。

また、両作家とも男性キャラクターのことばにはかなり中性的な要素を与えていることも分かった。

5. 今後の課題

本研究では吉本ばなの『アムリタ』と村上春樹の『ノルウェイの森』の1巻の中に出現するインフォーマルな会話の文末表現の性差が作家によってどう異なるかを調査したものであるが、数量的分析結果の信頼性を高めるためには更に多くの作品を調査対象としなければならない。本研究では、吉本ばなも村上春樹も共に、男性キャラクターに中性的な文末表現を使わせる傾向があることがわかったが、これは彼らがきわめて現代的な作家であるためなのだろうか。あるいは、作家の属する世代によって作品中の会話の文末表現に表れる性差は異なるのだろうか。また、作家の性差と作品中の会話部分に出現する文末表現の性差にはなんらかの関連があるということが一般論としても言えるのだろうか。以上のような点を調査するためには、様々な作家の作品を世代別、性別に分析する必要がある。発展的な研究課題としては、自然な日常会話のデータを集め、文末表現に性差が表れるかどうかを、年代、対話相手、話者の職業、地域、場面などを考慮しながら、社会言語学的側面から調査分析することも考えられる。従って、数量的分析のみならず、それぞれの文末表現の質的分析が大きな課題となるだろう。

注

- 1) 1994年福武書店刊。
- 2) 講談社文庫1991年版を使用。初版は1987年講談社刊。
- 3) 便宜上、以下の項目は次の範疇に入れた。
名詞・形容動詞+「よね」→9) 「だよね」→10) 「わよね」→11)
「のよね」→12) その他の助詞+「よね」→13) 禁止形→31)
また、24) 27) 28) 29) 30) 32) は「よ」「ね」が付いた場合でもこの範疇に入れた。
- 4) 次の9作品のことである。井上靖『愛』、『青衣の人』、中島敦『李陵』、三島由紀夫『絹の明察』、『盗賊』、『潮騒』、谷崎潤一郎『青春物語』、『春琴抄』、『痴人の愛』

参考文献

- 石村貞夫 1998『SPSSによる多変量データ解析の手順』 東京図書
- 井出祥子 1979「大学生の話しことばにみられる男女差異」『昭和54年度科学研究費—特定研究「言語」報告書』
- 内田伸子 1993「会話行動に見られる性差」『日本語学』第12巻第6号, pp.156-168.
- Jin, M., & Murakami, M. 1993 Authors' characteristics writing styles as seen through their use of commas. *Behaviometrika*, 20(1), pp.63-76.
- 鈴木 睦 1993「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』第12巻第6号, pp.148-155.
- マグロイン花岡直美 1993「終助詞」『日本語学』第12巻第6号, pp.120-134